泥の勲章

邦光史郎

泥の勲章

邦光史郎

広済堂出版

泥の勲章

発行昭和四十五年五月二五日

定価　三九〇円

著者　邦光史郎

発行者　桜井文雄

発行所　広済堂出版

東京都新宿区下宮比町十五番五号　モリサワビル3F

電話　（二六七）二三六一

振替　東京一四一一四二番

印刷所　桜井広済堂

© 1970 邦光史郎

泥の勲章

目次

第一章　流体と気体　五
第二章　奇妙な関係　二六
第三章　秘書の務め　五九
第四章　正確な照準　八五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第五章　異常のはじめ　一一〇
第六章　人間蒸発　一三七
第七章　輸入重役　一六六
第八章　R三号井　一八九
第九章　人工島　二二四
第十章　社長秘書　二六二

第一章　流体と気体

1

空は濡れた一枚の布だった。
野も森も村落も、たっぷり水分を含んでいた。
国道一二六号線は、黒い川だった。うねうねと山裾をくねり、波乗りするようにアップ・ダウンをくり返し、崖っぷちを帯のように巻いて、小さな集落を、いくつも送り迎えた。
空色のクーペは、深海魚族のように、雨の午後という時間を泳いで進んでいた。
カー・ラジオのラテン・ミュージックにつれてウィンド・ワッシャーが踊っていた。
それは、カマキリの舞踊に似ていた。
野呂、宮田、高根、大草、加曽利、みんな小さな部落であった。一ならびの人家のあいだをくぐり抜け、やがて、千葉市が近づいてきた。
次第に車の流れがふえ、速度計の指針は、五十から四十に落ち、大和橋を渡ると、ロータリーのある四つ角が見えてきた。
クーペは、百貨店のある一ブロック手前で、うまく駐車するスペースをみつけた。
アーケードの下に露店がならび、雨に追い立てられたような男と女と老人の顔が、こみ合っていた。
三十分ほどたって、男はクーペに戻ってきた。
腕に、紙箱を抱えた長身の青年であった。渋好みの服の襟もとからのぞけるカラーの白さが目にしみるようだった。
紙箱を、後部座席に投げ込んで、男は、また車をころがした。
メイン・ストリートをゆっくり進んで、ガード下に向った。そのバック・ミラーに、鈍重な犀(さい)にも似たダ

ンプ・カーが映っていた。まるで、追いすがってくるように、ダンプはぴったり背後に貼りついて、離れようとはしない。
男は、すこし、スピードを上げた。
ガードに沿って、道をそれ、次の高架下をくぐり抜けようとした。
だが執拗に、ダンプは追ってきた。
八トン積みのでかい図体が、のしかかるように追ってくるのだ。
桁の低いガード下へ、クーペは、逃げこんだ。
けれど、目の前に、植木鉢を積んだ小型トラックが邪魔をしていて、それ以上、逃げ切ることはできなかった。
もう、千葉街道はみえていた。
その向うから、濁った海の匂いが漂ってくるようだった。
運よく小型トラックが横道へ左折してくれた。
狭い道を、男は、たしかめた。
あれなら、うるさいダンプの重圧感をふり切るにはもってこいだ。
ハンドルを切って、男は、その安全地域へかけこもうとした。
前窓に吊したマスコット人形が、大きくゆれた。
落下傘のように開いたスカートから、脚が二本、宙に踊った。
あの女の脚もこんな風に踊ってひらいた。きれいにのびた脚だった。なめらかで、傷跡一つない脚だった。ビロードのようにすべすべしていた。
男の口許に笑いの影がにじんだ。
クーペが尻をふりつつ、横丁にすべり込もうとした。
そこへ、ダンプが突っ込んできた。
クーペの鉄板が圧し潰されて悲鳴を上げた。
タイヤが宙に浮いて空廻りしている。
一度、ダンプは後退して、もう一度、更にはげしく、乗り上げてきた。
ブルドーザーのように、ダンプのフェインダーは、クーペを薙ぎ伏せた。

2

大手町にある、東洋石油東京支社の役員室は、ビルの四階に位置していた。

目の下に濠の水と松と芝生の緑がひろがっている。

速い流れの車群のあいだを、ゆっくりとかき分けるようにして都電が動いていった。

秘書室長片岡忠雄は、窓辺に佇んでピースを喫っていた。

紫の細い布となってよじれた煙が、彼の粗いなめし皮のような顔面にまつわりつつ、高い鼻梁に沿っては い昇っていった。

背後で、扉の開く音がした。

「やあ、どうも」

豆のはじけるように、騒がしいひびきをもつ声であった。

片岡は、ふり返って、会釈を送った。

東京支社長中向秀樹は、ぽってりと肥った手を上げて、軽く答えた。

肥満体を、揺するようにして全身を愛嬌で波うたせ、中向取締役は、待ち疲れて目をとじていた鳥飼専務のかたわらに腰をすえた。

細い針金で作った人形のようにたえず鯱ほこ張っている鳥飼専務のからだは、たちまちしゃんと背筋を伸して、中向を迎えた。

「九分遅刻だ」

「何しろ交通麻痺でね」

「言い訳にはならんね。しかし、まあいい。それより時間が惜しい。片岡君の報告を、早速、聴くことにしようじゃないか」

ノックと共に、支社長づきの女秘書が入ってきて、絞り立てのジュースを配った。

片岡忠雄は、二人の重役と向い合う席について、一口、ジュースを啜った。

「で、どうだった？　千葉の方は？」

スリー・キャッスルを、罐から抜き取って、中向支社長は、片岡をみつめた。

「後始末は、一応、すませてきました」

「森山君の妻君は、もうきていたかね？」

「なかなか気の強い奥さんでしたよ。脳貧血でも起すんじゃないかと、はらはらしていましたが、案外テキパキと処置したのには感心しました」
「まだ若いんだろう？」
「二十八です。子供がひとり」
支社長に答えながら、片岡の眼は、いら立ちを浮べてむっつり煙草をふかしている鳥飼専務を捉えていた。
「専務、しかし、森山君は、なぜ、わざわざ千葉市内をうろついたんでしょうな？」
頬骨のとび出した専務の顔が、片岡に向けられた。
「森山は、まっすぐ東京から、五井へ向ったんじゃなかったのか？」
目で、片岡はうなずいた。
「潰れたクーペの中から、千葉名産の落花生煎餅の箱がみつかりました。市内のデパートで買った品でした」
「あいつ、妻君の土産を、先に買ったんだな」
中向支社長がつぶやいた。
「しかし中向君、東京、千葉間は、二十六キロ。それに、森山が出発したのは、午前九時だよ。いくら、千葉のデパートで買物をしようと、午後一時には、五井製油所に着いているはずじゃないか」
「東京、五井間は、途中休憩をしたとしても一時間三十分でいけるはずです」
片岡は視線を、窓に向けた。鉛色によどんだ雨空が、彼には、五井の砂浜にみえた。
たえず風速十メートルから十五メートルの風が吹き荒んでいる五井の埋立地は、砂漠に似ていた。
あの砂漠に、東洋石油は、すでに百億円をこえる札束を埋めているのだ。
「その上、彼の乗っていたクーペ、これは、会社の車でして、配車係の控えをしらべますと、森山が借りだした時のメーターは、九、〇二一キロでした。ところが、事故を起した時のメーターは、九、〇九三キロ。つまり、約七十キロほど、森山はクーペを走らせたことになります」
「なんだと？　東京、千葉間は、君、二十六キロのはずじゃないか」
「彼のポケットの中から、京葉有料道路の通行券が出

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

てきました。これです」
テーブルの上に、片岡は一葉の切符を置いた。
京葉道路通行券　¥60　小型乗用自動車、小型貨物自動車、「通行一回限り」この巻をもって領収書に代えます。日本道路公団
青い丸スタンプの日付印が捺されていて、通行券の番号が刷り込まれている。
片岡忠雄は、その番号によって、何時頃、森山のクーペが、京葉有料道路のゲートを通過したかを確かめていたのだが、その事実は、伏せて置いたのである。
「つまり、森山君は、京葉道路を突っ走り、千葉街道を、千葉市に向って走ったことは明らかなのです」
「というと、キロ数のでたのは、その後のことだというのかね？」
いくらか声を落して中向支社長は、細い眼に光を点じた。
「ボディーの汚れをみても、そうだとしか思えません。かなり泥をかぶっていました。千葉街道から先といえば、五井、木更津へ向う二級国道一二七号線と、成田へ向う成田街道、そして、東金から銚子市へつづく二級国道一二六号線、それから、もう一つ、印西町から竜崎市へ向うルート。ざっと考えても、これだけありますが、何しろクーペのことですから、どんな狭い道でも、走ろうと思えば、走れないことはない訳です」
「要するに、その間の距離と時間のブランクは、森山にしか分らん訳だな、今となっては」
専務は、腕時計に目をやった。
「死人に口なしですか」
支社長は、ジュースを飲み干した。
「しかし、どうしても、私には、何故、森山君が千葉街道へ出ようとして、あの地点で事故を起したのか、それが分りません。これが、五井からの帰路であるなら、問題は別です。しかも、彼は、至って忠実な、几帳面すぎる程、間違いのすくない男だったんですから」
「で、相手のダンプの運転手は？」
「いねむり運転だと、警察では言っていますが、一度、突っ込んで、もう一度、一たん後退してから、更に、乗り上げている。加害者の聴取書によれば、あわ

てていて、何をしたのか、よく覚えていないと、いうんですが、私はそこに、偶然だけとは言い切れないものを感じましたね」
「というと？」
支社長は肥った円い膝をのり出した。
「まさか君……」
貧乏ゆすりをやめた専務の声が甲高いひびきをもった。
「ダンプの所有主は、城東建設という、土木業者でして、運転手は、いわゆる渡り者です。つまり、金さえもらえば、なんでもやりかねない男だという印象なんです。しかし、むろん、これは、単なる臆測にすぎません」
東洋石油社長付正秘書、それが森山の肩書だった。それを、あのダンプ・カーの運転手は知っていたのかどうか？　片岡忠雄は、その回答を手探りしていた。
「考えすぎじゃないのかね、片岡君。それに第一、森山君は、それ程、重大な任務を帯びた、秘密工作員でもなんでもない。単なる秘書であり、社長の五井視察に先立って、そのスケジュールの打合せと、下検分のために、五井製油所へ向った。それだけのことにすぎない。そうだろう？」
それとも、まだ、その裏があったのかと、専務は、問いかけた。
「専務のおっしゃる通りです。しかし、それにしても、あのダンプのやり方は、少々残酷すぎました。何しろ、左折するぞと、森山君が、尾燈を点滅させつつ、左へハンドルを切ったクーペをですね、夜ならいざ知らず、真昼の午後一時に、はっきり確認していながら、突っかけて、しかも、一度後退しておいて、また、乗り上げた。いわば、止めを刺したんですから、何か殺意に似た残忍さが感じられてならないんです」
たとえ、過失にしろ、事故を起して相手を撲殺したなら、自分だって罪になることぐらいは、その時、ダンプの運転手が意識しないはずはない。
それを、敢えて、二度も突っ込んできたのは、なぜだろう？
片岡は、眼顔で、それを、専務に伝えた。
「だが君、それは、平常人の感覚なり常識であって、獣性を帯びた異常神経の男には通用しない。事実、連

中のなかには、そういう獣性を発揮する男がいるんだよ。特に、自家用車をみると、いじめてやりたくて、むずむずする連中が、ダンプ・カーという戦車のような車に乗り込んでいるんだ。こいつ、一つ、引っかけてやれ、そんな殺伐な気持で、突っ込んだと、考えてもいいよ。あわてて、逃げるオーナー・ドライバーを見て、彼らは溜飲を下げるんだ。ところが、タイミングが一瞬ずれて、乗り上げてしまった。僕は、そう解釈するね。いわば、未必の故意だよ」

「未必的故意でしょうか？」

たしかに、専務の言うとおりかもしれない。それに、恐らく警察は、この事件を、業務上過失致死として、処理するにちがいない。

傷害致死ですら、わずかに、懲役四年の刑だというのに、それでは、轢殺された森山が浮ばれない――。

片岡忠雄は、ピースに火をつけた。

「専務、どうも僕は法律に弱いんだが、その未必の故意ってのは、なんです？」

支社長は、好奇心に駈られてたずねた。

「未必的故意ってのはだね、つまり、結果がこうなると分っておって、なおかつ、これを行った場合をいう法律用語だよ。これには、フランクの公式というものが用いられて、未必であるか、認識ある過失にすぎないかが分けられている。つまり、人をひき殺すだろうと分っていて、本人がどうしたか？　という質問を設定するんだ。そして、それでもやったとすれば未必の故意となり、それならやめただろうが、自分の運転技術に自信をもっていて、つい誤って人をひき殺したなら、認識ある過失となる。だが、どちらにせよ、この判定は、容易じゃないね」

話題は法律的に傾いていった。

だが、片岡忠雄は、あえて、それを、元へ戻そうとはしなかった。

あれが、もし、故意ではなく、殺人の目的をもつ行為であったら、どうだろう。

仮りに、兇器をもって、人を殺せば、殺人罪になるが、自動車でひき殺したなら、過失致死ですんでしまう。

そんなひどい話があるものか。

いや、こんな恐しい事実はない。委託殺人が容易に

成り立つのだ。
報酬をもらって、殺人を請負い、目的の人物を、監視して、計画をたてる。そして、ダンプで実行する。ミニ・カーを圧し潰しさえすれば、相手は鉄の箱の中で絶命する。
しかも、最悪の場合でも、未必の故意ですんでしまうのだ。せいぜい長くて二年か三年の懲役。こんなに安全で、確実な殺人方法が、他にあるだろうか。
片岡忠雄は、それを妄想だと考えて、拭い去ろうとした。
あの男は、要するに、不運だったのだ。
彼は、よく訓練された社長付正秘書の死を悼んだ。
女秘書の補充はいくらでもみつけられるだろうが、森山のように有能なスタッフは、そう簡単にみつけ出せるものではない。
これで、仕事が、また、やりにくくなった——。そこまで考えた時、片岡忠雄は、思わず、太い眉をけいれんさせた。
あるいは、これは、自分に対する挑戦なのではあるまいか。
森山という標的を、もし、わざわざ択んで射落したとすれば、その相手は、何者なのだろう。そこまで機密に通じている者が、いようとは思えない。
だが、たしかに、自分の目前で、森山は惨死した。
どこかで、自分の知らない間に、何かが進行しているのではあるまいか。
彼は、同席している、専務や支社長の存在を忘れ去るほど、その自分の発想に強く捉えられた。
「ところで片岡君、こうなると、序列からいえば森山の後任は川村ということになるが、そうなると、僕の専任秘書の補充を考えなくちゃならんね」
まるで、その予定候補者があるかのような口ぶりで、専務は、片岡をみつめた。
「そうですな。一つ専務御自身から、御推薦頂きたいですね」
眼許から下の顔面に、柔和な笑みをたたえながら、片岡忠雄は、鋭く鳥飼専務の表情の裏を読み取ろうとした。
「そうだね、秘書の適任者は、何人かいる。しかし、その中で最右翼といえば僕は、名取という男を推

すね」
「名取ですか、たしか広報室にいる男でしたね？」
「そう、以前調査にいた男だ。あの男は、使えるよ。まだ若いがね」
疑心であるのかもしれない。しかし、片岡忠雄は、専務の声が、ある企みの熱気のために、いくらか乾いたものになっていると感じた。

3

四日下旬の新潟地方は、まだ山間部に積雪を残しながら、海浜地区は、フェーン現象のために、上衣を脱ぎたいぐらいの暖かさであった。
重い鉛を融かしたような日本海に向って、なだれこむように山が迫っている。そのわずかな間隙を縫って、鉄路が二本の白線を巻きつけたように走っていた。
新潟県は、雪と米と油の国だと言われているが、その印象は、全体に暗く陰鬱である。
汚れた根雪が、一斉に融けて、川のように山間部から低地である田畑に向って流れこみ、平野は、巨大な池となって氾濫し、稲架であるたもの木の列が、まるで墓標のような影を水面に浮べている。
長い積雪期につづくこの洪水期のために、川という川は激流をなして走り、人々は、細い残された村道にたたずんで、自然のきびしさをみつめるばかりなのだ。
むろん、こんな状態であるから、すでに青々とした麦畑の手入れをすませている表日本と違って、農耕に励むことは出来ない。
越の国の貧しさは、こうした自然の冷めたい表情の翳りに由来しているのかもしれないけれど、もう一つの重要な産物である黒い油はどうかというと、天智天皇の七年、秋七月、越の国から、もえる水、もえる土が献上されたという「日本書紀」の記載にある通り、新潟の石油の歴史は古いのである。
この地方の古代の民は、夏になると、この燃える土を、拾い集めて、冬は、それを薪として暖をとった。これを、土薪といった。
石油は、ひとりでに湧き出して、池となったのだ。

これを壺と称して、この地方の中世の民たちは、カグマ草と呼ぶシダ類の草葉に浸して、もえる水をすくい取り、また油の浮んだ川の流れをせきとめて、たまった油を、集めるようになった。その頃、越前の浪人、真柄十郎次は、主家を浪人して、越後の柄目木村に住居を構え、この壺に着目した。

秋葉山のふもとに位置する柄目木村には、当時、二間四方の池があって、土地の者は、煮壺と称していた。壺、すなわち、油井であって、この煮壺は、噴出する原油と天然ガスのために、池の表面はいつも煮えたぎって、噴煙は白くたち昇り、その轟音は、一里四方に鳴りひびいたというから、さながら地獄の池である。柄目木という地名はその轟音からとったのだという。

真柄十郎次は、人の恐れる地獄の煮壺から、油を採ることを思いつき、寛永七年、新発田藩主に願い出て、銀三百匁の運上金（税金）を払う約定で、原油採取の権利を得た。これは、永久採取権であり、同時に販売の権利をも兼ねていた。

江戸時代の人は、石油を、臭生水または草生水と称し、天然ガスを、風臭生水、軽いガソリン分はよく燃えるので、気狂臭生水と名づけていた。

越後七不思議の一つとして珍しがられた天然ガスは、土中に竹筒をさしこんで、これをいろりで囲い、竹筒の先にいくつかの火口をつけて、火を点じて灯りに使用したのである。

しかし、江戸時代人の燈火の主体は、菜種油であって、石油を利用することはまだ考えつかなかったとみえる。だから、当時の人たちは、この石油を、脚気を防ぎ、中風を予防する保健薬として珍重した。

一坪の井戸から、すくない時で三リットル、多い場合は十四リットルの油を採り、これを油舟に積んで、各地へ運んだ。

だが、こうして自然に流出するままに委せていた石油も、幕末、天保年間になると、次第に涸渇して、湧き出さなくなってきた。

そこで、上総の国に発達していた、上総掘りという井戸掘り技術を導入して油井を掘った。しかし、それではせいぜい五十メートルから百メートルが関の山で、それ以上深い穴は掘れない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com